二条城二の丸御殿の大広間等諸御殿の復原研究

—建築と障壁画の総合的検討—

A STUDY ON THE ORIGINAL PLAN AND THE PANEL PAINTINGS
OF NINOMARU PALACE OF NIJO CASTLE

西 和夫*, 小沢朝江**

Kazuo NISHI and Asae OZAWA

This is a study on the original plan and the panel paintings of the *Shirosyoin* of Ninomaru Palace of Nijo Castle. The results are as follows.

1. The Keicho plan of the Ohiroma can be reconstructed. The alcove and the shelves were originally on the north of the *jodannoma* and *tukesyoin* was on northwest of that room.
2. The length of papers of wall paintings can be classified into three groups of the *Shirosyoin*, *Kurasyoin*, and the others.

Keywords : *Ninomaru palace of Nijo castle, Ohiroma, Syoin style, original plan, panel paintings, length of papers*

二条城二の丸御殿、大広間、書院造、復原平面、障壁画、料紙寸法

はじめに

二条城二の丸御殿は、すでに知られている通り¹⁾、慶長6年(1601)から8年にかけて(以下これを慶長度造営と呼ぶ)徳川家康によって造営が行われ、寛永3年(1626)の後水尾天皇の行幸に備えて同元年から3年にかけて(これを寛永度造営と呼ぶ)徳川家光によって、慶長度御殿の柱などを生かして新築に近い改築を行ったものとされている。

二の丸御殿のうち白書院については、先に、慶長度御殿の復原平面を提示し、また、現存する障壁画が寛永度のものであることなどを明らかにした²⁾。

本稿は、白書院以外の御殿について、大広間を中心に慶長度御殿の復原検討を行い、また二の丸御殿全体の障壁画について料紙寸法の検討を行って、判明した諸点を報告するものである³⁾。

1. 大広間の復原検討

1-1 部材痕跡等による検討

大広間一の間(上段の間)と二の間(下段の間)の柱には図1のJ・K・L・Mの柱に埋木や当木があり、これによって現在2室構成のここがもと3室構成であったことが判明し、また『義演准后日記』や『言経卿記』によって慶長度は上段・中段・下段の3室構成

だったことが裏付けられることをすでに報告した⁴⁾。以下にその後判明した諸点を示そう⁵⁾。

一の間(上段の間)のトコ・棚後方の3本の柱A・B・Cには天井長押が取り付けいていた痕跡があり(図1・4)、その高さは現在の一の間天井長押と同じである。また、トコ・棚前面の柱D・E・Fはいずれも上部で梁を支えていない不自然な状況で(図4)⁶⁾、後補であることが明らかである。慶長度にはトコと棚は現在の位置になく、現在のトコ・棚のところまで一の間天井が入り込んでいた。現在のトコ・棚は寛永度に作られたものとなる。

図1のGの位置、ここは現在のトコの北西隅柱Aから慶長度の上段・中段境の柱Jまでの距離を二等分する位置であるが、この位置の梁に柱のほぞ穴があり(図5)、しかもこの位置の床下に現在使われていない(柱も束も支えていない)礎石があって、慶長度に柱が立っていたことを示している。ここに柱が立てば現在の付書院は存在しえないから、付書院は寛永度に作られたことになる。

柱Cの南面と柱Kの北面には、高さ1尺7寸ほどの小壁が天井から下がっていたことを示す痕跡がある。一の間と帳台の間はユカの高さが同じで、しかも両室は大引が通っている。また、柱CとKの中央の位置(I)に釣束の痕跡が梁側面にある⁷⁾。すなわち、一の間と帳台の間は天井から下がる小壁だけで区切られ、ユカが通った状況

* 神奈川大学工学部建築学科 教授・工博

** 湘北短期大学生活科学科 専任講師・工修

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kanagawa University, Dr. Eng.
Lecturer, Dept. of Living Science, Shohoku College, M. Eng.

にあった。帳台構は現在の位置になかったことになる。

一の間と二の間は現在折上格天井で、二の間の天井長押の高さは一の間より5寸低い。しかし、二の間の柱には現在の一の間と同じ高さに天井長押の痕跡があって、慶長度には上・中・下段とも天井長押の高さは同じだったことになる。ただし、現在の一の間の南寄り（もと中段部分）の天井は、梁を欠いて無理に折上格天井を入れており、当初は上段の間のみ折上天井で、中・下段は平天井だったと考えられる。

現在の二の間と三の間の境は襖と彫刻欄間で仕切られているが、柱M・Pにはかつて二の間から三の間へ天井長押がそのまま延びていたことを示す痕跡がある。柱Mから柱Pの間には貫が1本も入らず、また鴨居と内法長押は東西方向の長押を切って入れている。以上のことから、この間仕切は寛永度のもので、慶長度には下段の間と現在の三の間の連続した一室であったと考えられる。

1-2 座敷飾等の検討

以上のように、現在のトコ・棚・付書院・帳台構はいずれも慶長度には現位置になかったことが判明したが、慶長度に座敷飾がひとつもなかったとは考え難く、どこにあったかが次の問題となる⁹⁾。まずトコは、柱Aの東面および柱Bの西面に内法長押や鴨居が取り付けいていた痕跡がなく⁹⁾、建具にも貼付壁にもなりえないから、ここがトコであったと考えられる。落し掛の存在を明示する痕跡はないが、天井廻縁に接するほど高い位置に落し掛があったとすれば¹⁰⁾、室外に北に張り出す形式のトコがここにあったと考えて矛盾しない。すでに指摘したように¹¹⁾、慶長度に家康が諸大名と対面したとき、ここが家康が坐った背後になり、この位置にトコがあった蓋然性は高い。棚は、柱BとCが慶長度の位置を保っていると考えられるので、柱BとCの間にあったと考えざるをえない。トコ・棚がこのように復原された結果、付書院は、柱Aと復原された柱Gとの間にあった可能性が高い。しかし、帳台構については、その位置は不明である。

ここで考えておかねばならないのは、帳台の間・物置・四の間のあたりは寛永度の改変が甚だしいのではないかという点である。

その第1の理由は、寛永度材木帳に「仕直シ」¹²⁾などと書かれた改造を明示する材は、慶長度の中段の間のうち21.3畳分（東西4間、南北4間×2/3）を寛永度の一の間（上段の間）に改造するためのものと考えたとき、面積が一致し、「仕直シ」されたのがこのあたりだけだった可能性が高いことである。すなわち、寛永度の材木帳に「仕直シ」などとある材は5種類しかなく、このうち桧割木・1尺角・長3間半・8本、桧・6寸角・長2間・15本、杉四々料・1尺5寸×5寸・長7尺・46枚、以上の3種類は寸法等からそれぞれ大引、根太、ユカ板の材と判断され¹³⁾、この3種類の材で構成される床面積は、慶長度の中段の間の21.3畳の部分に合致する¹⁴⁾。

一方、5種類の材と同寸法の材は、同じ材木帳で「仕直シ」と書かれていない大広間の材の中にもあり、その本数は根太と考えられる材が464本、ユカ板と考えられる材が524枚で、ユカ面積にすると約350畳分に当たる¹⁵⁾。この面積は、現在の大広間のうち、慶長度の上段・中段部分を除いた面積（入側を含む）に該当し、この部分の材は寛永度に新たに購入している。また小屋材は、6間長さの大梁¹⁶⁾をはじめ、野垂木と考えられる材¹⁷⁾が503本あるなど、大広間全体の小屋を構成するに十分な量が購入されており、小屋は寛永度に全面的に作り直されたと考えざるをえない。さらに、四の間天井廻縁に「二ノ丸、五味金右衛門、御ひろま東ノ口間」、一の間天井支輪に「御ひろ間上たん西かわ、いノ六、五味金右衛門」など、寛永度の大広間の造営奉行である五味金右衛門¹⁸⁾の名があり（図6）、白書院とは異なり、大広間は寛永度に天井を新たに作っていることが明らかである。このように、慶長度の材を生かして「仕直シ」すなわち改造を行ったのは慶長度の上段・中段まわりであって、それ以外は「仕直シ」ではなく全面的な改変であったと考えるのが妥当である。

第2の理由は、大広間の柱の中で太い柱は図1に示す7本で、いずれも構造上の重要な位置に配されており、構造上の配慮が十分になされていることを明示するにもかかわらず、帳台の間・物置の東端の柱N以外、太い柱は一の間・二の間まわりにしかない点である。また、柱Nの南北柱列は、この位置に大梁を載せているにもかかわらず、柱Nを南にのぼした位置には柱がなく、大梁南端を柱が受けていない¹⁹⁾。構造上はここに柱があるべきだが、このいわば構造上

図1 大広間 現状平面図
[■は太い柱、●は痕跡により復原される柱または束]

図2 慶長度大広間 復原平面図
[寛永度造営で全面的に改造されたと考えられる部分は、一点鎖線で現在の間仕切を示した]

図3 『匠明』殿屋集「当代広間之図」

の配慮の乱れは、大広間の東半分を大規模に改造したために生じたのではないかと考えられる。

第3の理由は、三の間や四の間の柱は、太い柱Nの南面を除き痕跡が全くないことである。一の間や二の間に多くの痕跡があるのに比べてやや奇異な感じを受ける。これも、ここが全面的に改変されたとすれば矛盾なく理解できる。

以上のように、帳台の間・物置・四の間等は寛永度に大きな改変を受けたと考えられ、慶長度の平面をそのまま踏襲している可能性は低い。慶長度の帳台構の位置が不明なのは、そのためではないかと考えられる。

1-3 慶長度平面の復原

以上の検討をもとに、大広間の慶長度平面を復原すると図2のようになる。先に述べたように、トコ・棚・付書院については可能性の指摘はできても不明な点が残っているため、復原平面では点線で表示した。

大広間は慶長度には上・中・下段の3室構成であったが、現在室内には慶長度のユカの高さを示す痕跡は見えていない²⁰⁾。ユカ高に3段の段差を持つ部屋を2段に改造し、室内に痕跡を見せないためには、慶長度の上段が現在の一の間のユカ高、慶長度の下段が現在の二の間の高さで、それを現状のように改変するしか方法がない。先に述べたように、寛永度の材木帳のうち「仕直シ」と書かれた根太等のユカ材の量は、慶長度の中段の間のうち寛永度に一の間（上段の間）に改造したと考えられる部分のユカ面積に合致し、この検討を裏付ける。

慶長度の平面のうち判明した部分を見て気付くのは、『匠明』殿屋集に示された「当代広間ノ図」(図3)²¹⁾との類似性である。ただし、「当代広間ノ図」には上々段・折中門・車寄があるが、大広間の復原平面にはない。また、3室が一列に並ぶ部分はユカ高の記入がなく、これらと鍵手に繋がる部屋に「上段」とあり、ここに「床」「棚」が付き、この「上段」と接続する部屋との境は「フスマ障子」となっている。このように種々の相違はあるが、3室連続した部屋があること、その第3室とそれに接続する部屋との境は建具がないこと²²⁾など類似する点も多く、類似平面のひとつとして参考になるう。

2. 黒書院・式台・遠侍の復原検討

2-1 黒書院

黒書院は、室内・床下・小屋裏に復原資料となるような痕跡がなく、寛永度造営で平面の大規模な改変が行われた可能性は低い。しかし一方、寛永造営時の大工工数が同時期に造営された行幸御殿等と比べて少ない²³⁾ため、全くの新築とは考えられず、また四の間の天井格縁に「うしノ寛永二年」の墨書がある(図7)から、寛永度に工事が行われていることも明らかである。ただし、寛永度造営の材木帳に書き出された黒書院の材は、大広間の同寸法のものとは比べ本数が少なく²⁴⁾、材木帳がすべて残存してはいないので断定はできないものの、大広間に比べて黒書院の改造が小さかったことを窺わせる。すでに報告したように²⁵⁾、白書院の平面は慶長度には現状と大きく異なっているが、慶長度の黒書院から白書院への廊下は、寛永度の廊下²⁶⁾と同様東側に設けられ、黒書院牡丹の間から白書院東指出へ出るようになっていたと考えられる。

黒書院の現状平面は、元和2年(1616)の名古屋城本丸広間および御殿の2棟の平面²⁷⁾によく似ている。黒書院が幅2間の帳台の間を設け、その東側を四の間としているのに対し、名古屋城本丸広間と御殿は帳台構の裏を広い帳台の間としており、この点が相違するものの、上段の間より下段の間の幅が広いことなど、共通点が多い。黒書院の平面が慶長度からのものであった蓋然性は高い。

2-2 式台・遠侍

遠侍は、芙蓉の間北西隅柱北面の内法長押とほぼ同じ高さにある埋木以外、室内に見えている痕跡はないが、帳台の間が上段の間側からしか出入りできないなど、平面に不自然な点が見られる²⁸⁾。遠侍の小屋組のうち、入側縁の内側柱列に載る敷桁には「東かわ南ノはな」など位置を示す彫込みがあるが、この敷桁と同様の材は物置・芙蓉の間の北側・南側および芙蓉の間東側の柱筋上にもあり、それぞれ「北中とをり」「南ノ中とをり」「北ノ中とをり」との彫込みがあって、慶長度にここが部屋境であったことを示している。また、物置部分に架かる梁はいずれも転用材で、この部分が寛永度の改造であることを示唆する。敷桁の位置とも考えあわせると、かつては物置部分が中庭であった可能性があるが、これ以上の資料を欠き、断定はできない。

図4 柱B・Eの痕跡
[右がB、左がE。上の図は○部分の説明図。アミかけ部分が内法長押の痕跡。Eの頂部は梁を支えていない]

図5 旧柱位置G ほぞ穴

図6 大広間上段の間
天井格縁墨書

図7 黒書院四の間の
天井格縁墨書

式台は、寛永度の材木帳に「仕直」「作直シ」と書かれた材が含まれていて²⁹⁾、慶長度の御殿を改造して用いたことは明らかである。しかし、大広間と同様に、「仕直」と書かれた材と比べ、同じ寸法で「仕直」と書かれていない材の方がはるかに量が多く³⁰⁾、大規模に改造されたことを示している。式台が大広間と遠待の間に後から引き移して接続したものであることはすでに指摘されている³¹⁾が、小屋裏を見ると遠待と式台の接合部分は共通の材で済むはずの小屋束が二重に存在するなど、独立した遠待の屋根に後から式台の屋根を接続した様子が明らかで、式台を後から接続したとする指摘と符合する。しかし、慶長度の様相を知る明確な資料を欠き、これ以上の検討は困難である。

3. 二の丸御殿障壁面の料紙寸法による検討

3-1 諸御殿の料紙寸法

障壁面検討の一方法として、料紙寸法の分析を行うことが建築の復原考察上も有効なことはすでに述べた通りである³²⁾。1枚の料紙の縦方向の寸法について、表面に見えている寸法と重ね合わせの寸法（糊代といってもよい）を実測し、縦軸に表面に見えている寸法、横軸に実寸法（表面に見えている寸法と重ね合わせの寸法の合計）をとってグラフを作成し検討した。白書院についてはすでに報告した³³⁾ので、ここでは大広間と黒書院のグラフを示すと図8・9の

如くなる。

白書院の場合は、5室とも共通して、建具グループと貼付グループに分かれ、さらに貼付グループは内法長押の上と下とに分かれたのであったが、他の御殿は次のような特性を示している。

まず、大広間・式台・遠待は、貼付も建具も、内法長押の上も下もすべて同じ寸法で、トコだけが大きいという共通する様相を見せる。次に黒書院は、内法長押の上と下は差がなく、建具と貼付で寸法が異なる。

このように、二の丸御殿の料紙寸法は、(a)大広間・式台・遠待、(b)黒書院、(c)白書院、この3つのグループに分けられる³⁴⁾。

3-2 料紙寸法と担当奉行

上に述べた料紙寸法のグループ分けは、すでに報告した通り³⁶⁾、大広間・式台・遠待が五味金右衛門、黒書院が小野宗左衛門、白書院が小堀政一という、寛永度造営の3人の造営奉行の担当の別³⁵⁾と一致している。

この事実が示唆するのは、料紙が奉行によって選択・採用されたのではないかということである。その可能性は高いのだが、しかし、例えば黒書院の場合、なぜ建具と貼付で料紙が異なっているのか、奉行だけではうまく説明できない。貼付と建具の担当は、現在の用語で言えば経師と建具職と、職種が異なることが多いから、黒書院

図8 大広間 障壁面の料紙寸法

の場合は担当した職種によって料紙寸法の扱いが異なっていた可能性を示唆する。また、白書院の場合、貼付のうち内法長押の上と下では料紙が異なるから、担当の職種は同じでも工事の進行状況の違いによって料紙の扱いが異なっていた可能性も考えておく必要がある。

このように、誰が料紙を選択・採用したか、この点を料紙だけをもとに論ずるのは容易ではない。しかし、この3つのグループが料紙の特性を異にしていることは確かであって、今後、筆者の問題などの分析においては、この点をふまえた検討が必要である。

おわりに

二条城二の丸御殿のうち、大広間を中心に慶長度御殿の復元検討を行い、また障壁画について料紙寸法の分析を行った。判明した諸点を列記すれば、次の通りである。

- ①大広間の慶長度平面について、上・中・下段構成の主要な3室や座敷飾が復元された。
- ②大広間の慶長度復元平面は、『匠明』殿屋集「当代広間ノ図」と類似する。
- ③黒書院は、寛永殿造営では慶長度平面をあまり改変しなかった。
- ④式台・遠待は、慶長度平面を復元するには資料が不足するが、いくつかの復元に関する知見が得られた。

- ⑤障壁画の料紙寸法は、白書院、黒書院、大広間・式台・遠待の3つのグループに分けることができ、それは寛永度の造営奉行の別と一致する。

なお、障壁画の検討については、美術史の大手前女子大学教授武田恒夫・学習院大学教授千野香織両氏のご教示を得た。また、調査に当たっては、元離宮二条城事務所の宇野幸次（当時）・高橋脩二・坂井清の諸氏にお世話になった。記して感謝したい。

【註】

- 1) 澤島英太郎・吉永義信『二條城』相模書房・1942年、「二条城の創建及び沿革に関する考察」『重要文化財二条城修理工事報告書第三集』恩賜元離宮二条城事務所・1958年、川上貢「二条城の規模と建築の変遷」『元離宮二條城』小学館・1974年、平井聖・斉藤英俊「二条城二の丸御殿大広間・黒書院」『日本建築史基礎資料集成十七』中央公論美術出版・1974年、西和夫「二条城の建築史—造営実体の探求」『名宝日本の美術 姫路城と二條城』小学館・1981年・改訂版1991年、などがある。修理工事については『重要文化財二条城修理工事報告書第1集～第5集』元離宮二条城事務所・1955～76年、があり、障壁画については土居次義「障壁画 二之丸御殿遠待・白書院」前掲『元離宮二條城』、武田恒夫「障壁画 二之丸御殿大広間・式台・黒書院」前掲『元離宮二條城』、山根有三「円満院の障壁画」『全集日本の古寺第六巻』集英社・1985年、松木寛『御用絵師狩野派の血と力』講談社・1994年、などがある。
- 2) 西和夫・小沢朝江「二条城二の丸御殿白書院の復元研究—建築と障壁画の総合的検討」日本建築学会計画系論文報告集第489号・1996年11月。

図9 黒書院 障壁画の料紙寸法

- 3) すでに次の論文で大広間の復原について報告したが、その後の検討の結果、多くの新たな知見を得ることができた。また一部は先の報告と見解が異なることも生じているので、今回、既発表論文を前進させてここに報告することにした。西和夫「二条城二之丸御殿大広間の慶長度創建時の平面について」日本建築学会大会学術講演梗概集・1980年、西和夫・小沢朝江「二条城二の丸御殿の研究―建築平面と障壁面の復原(上)(下)」国華第1068・1071号・1993年3月・6月、西和夫・小沢朝江・天木詠子「二条城二の丸御殿における建築と障壁面の総合的検討―白書院・大広間の慶長度平面の復原を中心に」日本建築学会大会学術講演梗概集・1993年9月、小沢朝江「家康の御殿・大広間の復原」『名城シリーズ二条城』学研・1996年。
- 4) 註3の諸論文。
- 5) 一部は註3の諸論文で触れたが、その後の知見を生かし、また新たに根拠を示して説明する。
- 6) 柱D～Fの柱列には梁がなく、柱Eは独立して立っている。また、柱DとFは南北方向の梁の下に位置するが、ほぼ等で繋いでおらず、梁との間に隙間がある状態である。
- 7) 大広間の釣束は、頂部を2本の金具で梁から釣っており、Iの位置には、梁側面にこの金具を止めた当たりと釘跡がある。
- 8) もちろん座敷飾4種が揃っていたとは限らないが、時代背景や家康の御殿であることからみて、揃っていた可能性が高いことを認めてよからう。
- 9) 元離宮二条城事務所字野幸次氏（当時）のご協力により、トコ裏北面の壁板（舞良仕様になっている）をはずすなどして柱痕跡の調査を行った。
- 10) 正法寺大方丈（京都府、寛永7年）などの例がある。
- 11) 註1西和夫論文。
- 12) 『二条御城御作事御材木高弘帳扣』（京都府立総合資料館蔵）「二ノ丸広間仕直シ」など。
- 13) 現在の部材との比較、および同じ寛永度二条城造営の材木帳のうち材の用途の記載のある『二条御城二ノ丸北之御殿御材木弘帳扣』との比較による。
- 14) 長さ2間の根太を東西方向に1間4ツ割で架けたとして計算すると、根太の本数は7本（4間×2/3）×2列で14本となる。また、ユカ板は、東西4間（26尺）を1尺5寸幅の板で張ると11.5枚必要で、これが南北方向に4列あるため11.5枚×4列＝46枚となる。
- 15) 註14と同様。
- 16) 材木帳には「松、六間木、末口式尺五寸、式本」とあり、この寸法は、現在大広間の柱Nを通る南北柱列上に架かる大梁の寸法に合致する。

- 17) 註13に同じ。
- 18) 二条城寛永度造営の造営奉行については、註1川上論文。
- 19) 後に類似例として示す『匠明』殿屋集の「当代広間ノ図」の場合も、この位置に柱がある。
- 20) 柱J・Kには、現在のユカ高よりやや上に釘跡があり、工藤圭章氏はこれを慶長度の上段框の痕跡であるとされた「金碧まばゆい將軍上洛の館」（『不滅の建築11 二条城二の丸御殿』毎日新聞社、1989年）。しかし、これ以外に室内にはユカの高さを示す痕跡がなく、また柱A・B・Cに残るユカ板の当たりの高さは現在の一の間と同じであって、慶長度の上段の間のユカ高が現在の一の間の高さであったことを裏付ける。柱J・Kの釘跡は、慶長度のユカの高さを直接示すものではないと考えられる。
- 21) 東京大学建築学科蔵。『匠明』鹿島研究所出版会・昭和46年。
- 22) 「当代広間ノ図」には、間仕切位置に「フスマ障子」「杉障子」などの書き込みがあるが、連続した3室のうち第3室とそれに連続する部屋との境には書き込みがないことから、この位置には建具がなかったと考えられる。
- 23) 大工工数の検討は、註1西論文。
- 24) 例えば、ユカ板と考えられる杉四々料・長7尺・1尺5寸×5寸の材は、大広間が524枚、黒書院が89枚ある。
- 25) 註2に同じ。
- 26) 現在、白書院と黒書院の廊下は西側に設けられているが、『二條御城御指図』（中井家蔵）等によれば、寛永行幸時には東側に廊下があった。
- 27) 『なごや御城御絵図』中井家蔵。
- 28) この点については、註1平井・斉藤論文がすでに指摘している。
- 29) 『二条御城御作事御材木高弘帳扣』（京都府立総合資料館蔵）「二ノ丸殿上ノ間作直シ二道」など。
- 30) 例えば、割木・2間木・8寸角の場合、「作直シ」と書かれた材が7本、「作直シ」と書かれていない材が120本ある。
- 31) 註1平井・斉藤論文。
- 32) 註3国華論文、および西和夫・小沢朝江ほか「園城寺勸学院客殿・光浄院客殿の障壁面の料紙寸法による検討」日本建築学会関東支部研究報告集、1994年3月。西和夫「名古屋城本丸御殿とその障壁画について」日本建築学会大会学術講演梗概集、1994年9月。
- 33) 註2に同じ。
- 34) この点については、註3国華論文ですでに報告した。
- 35) 註18に同じ。

(1996年7月10日原稿受理、1996年10月8日採用決定)